

『月夜』 杜甫

月夜 杜甫 月夜 杜甫

今夜鄜州月 今夜鄜州の月
 閨中只獨看 閨中 只だ獨り 看るならん
 遙憐小兒女 遙かに 憐れむ 小兒女の
 未解憶長安 未だ 長安を 憶うを 解せざるを
 香霧雲鬟濕 香霧 雲鬟 濕おい
 清輝玉臂寒 清輝 玉臂 寒からん
 何時倚虛幌 何れの 時か 虚幌に 倚り
 雙照淚痕乾 雙び 照らされて 淚痕 乾かん

杜甫の、人に対する誠実な情愛を、妻子、友人、他人の別なく、等しく注がれた詩は多くあるが、ここでは妻にうたいかけた詩をとりあげてみた。

この詩は、至徳元年(七五六)の秋、四十五歳の時の作品である。まず、この年までの杜甫はどのような生活を送っていたのか、かいつまんで述べておこう。

杜甫は河南省鞏県で、杜閑と崔氏の間生まれ、祖父

は初唐の詩人杜審言で、父は地方官にすぎず中級士族の階層に属していた。二十歳ごろから放浪始めて、江蘇や浙江に数年遊ぶ。

二十四歳で洛陽に帰り進士の試験に落第し、再び放浪の身となり、山東、河北省一帯に遊ぶ。

その後、長安に出て三十六歳の時にも試験に落第し、就職活動をしたが成果なく不遇と貧窮の生活が続いた。

天宝十年(七五一)四十歳の時に、集賢院待制という官吏候補者の控所にいれられた。しかしすぐには官職につけず、天宝十三年には生活困窮のために、妻の里方の地方官をしていた人を頼って、妻子を長安から奉天県(陝西省)へ移した。

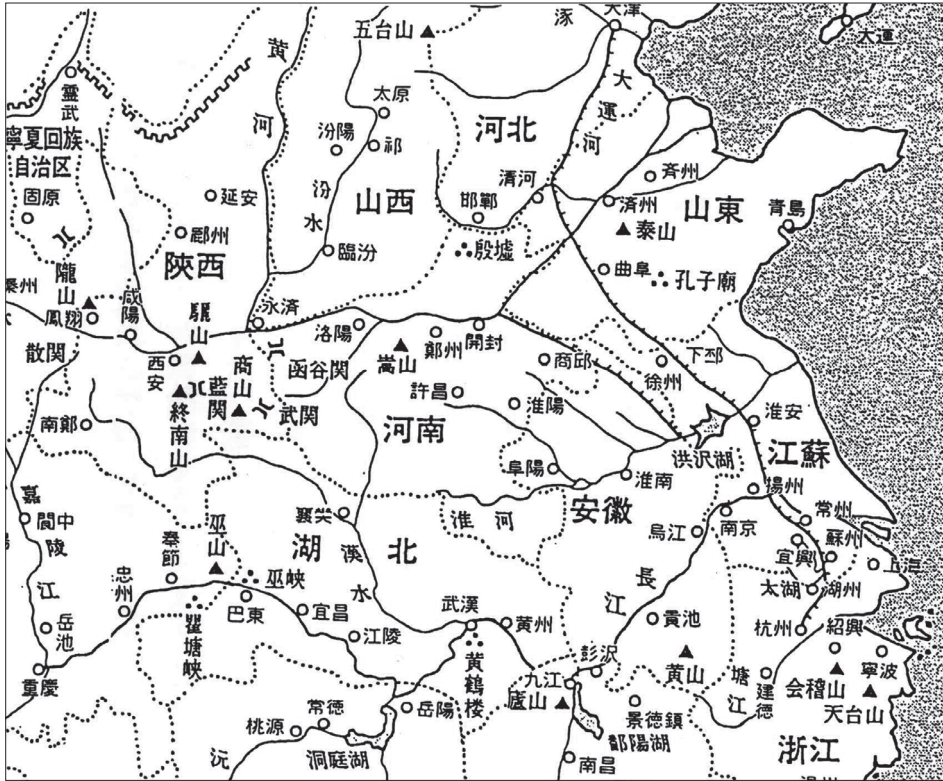
天宝十四年十月によく右衛率府胄曹参军という近衛軍の兵器課長にあたる官職を得たが、十一月に安祿山の反乱が起こり、十二月には洛陽が陥落した。

翌年六月には長安が陥落、玄宗は長安から蜀に逃れ、子の肅宗が即位して至徳と改元した。



鄜州に避難する杜甫の一家

杜甫は家族を鄜州の三川県（陝西省）に移したあと、肅宗の行在所に赴こうとして、途中で賊軍に捕らえられ長安



に軟禁されてしまった。時に四十五歳八月のことであった。この年の秋の夜、月を眺めながら遠地の妻子を思い、この詩は作られた。

【首 聯】

今夜 鄜州の月
閨中 只だ獨り看るならん

（意解）今夜、鄜州の空をも照らすこの月を、妻は寢室からただひとりひたすら寂しく眺めていることだろう。

《表現》妻の見る月

軟禁されている杜甫は、長安の上空に明るく浮かんだ月を見ながら、鄜州にいる妻も独りぼっちでこの月をみているだろうと想像する。（自分が明月を見ながら妻のことを思っている。同じように妻も、この月を見ながら自分のことを思っているだろう。）

【鑑 賞】

作者は、この句の歌い出しを、自分の見る月とせず、妻が居る鄜州を照らす月を想像しながら思慕の情を月に託して歌い出している。「今夜」は、今宵美しく照る月を導き出す語ではあるが、特定の夜を示すのではなく、今宵も、

と繰り返されている意味を含むであろう。鄜州は長安から北に約二〇〇kmも離れた所にあり、妻は疎開先の部屋から月を眺めながら、どこに居るとも知れぬ夫の身を案じていることであろう。「只」は、「独看」にかかる限定の語であるが、只だひとり、偏に看ると両方にかかっていると解釈してみたい。

【頷 聯】

遥かに憐れむ 小兒女の
未だ長安を憶うを 解せざるを

(意解) 遠くはるかに思いやられるのは、幼い子どもたちは長安に居る父の身の上を理解したり案じたりはできないことだ。

《表現》 子供や妻に対する愛情

幼い子供たちはまだ、遠くに居る父のことを慕う、ということは理解できないだろうと、そのあどけなさを哀れんでいる見事な表現。

【鑑 賞】

この二句は、形式上は対になっていないが、「小兒女」の小は憶と対すれば兒女の小さくしてと述語の働きをもし

ているものと考えれば、意味上からは、二句でひとまとまりになって「流水対」と呼ばれるものである。

【頸 聯】

香霧 雲鬢 濕い
清輝 玉臂 寒からん

(意解) 香しくたちこめる夜霧のために、妻の美しい髪の毛は、しっとりとした湿い、清らかな月の光を受けて玉のように美しいその腕は冷たく光っていることだろう。

《表現》

窓辺に肘をついて月を見ながら自分を思いやっているであろう妻の姿を想像している表現。

【鑑 賞】

この二句には妻の姿を美しく浮き彫りにする香、雲、清、玉と、女性にふさわしい美の修飾語を用い、さらに「湿」と「寒」という語で表現されることにより、幻影としての妻を美化している。窓辺にほおづえをついて夜霧に濡れるのは髪ばかりではなく、その瞳もであり、また月光に照らされるのは腕ばかりでなく、その心をもであらう。

【尾 聯】

何れの時か 虚幌に倚り
雙び照らされて 涙痕乾かん

(意解) ああ、いつになったら、(平和な世の中になって妻と二人で) うすぎぬの帳まきに寄り添いながら、並んで涙の痕が乾いた顔を月に照らされる日がくるのであろうか。

《表現》

妻と再会できた時の喜びを想像して、更に現在の寂しさを強めている。

【鑑 賞】

「虚幌」は人気のない部屋の帳と解することもできるが、ここでは月の光を透かすうすぎぬの帳とみたい。また「涙痕」は妻が夜ごとに流した涙の痕の意味を含むのであろう。できることなら今すぐにでも駆けつけて抱きしめてやりたい妻や、二人の息子と二人の娘である。家族愛、特に妻への思慕を、あからさまにする中に、捕われの身である作者杜甫の真情があふれている。

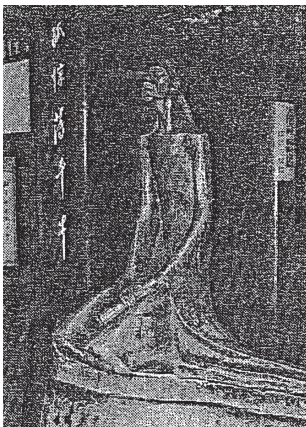
【探 求】

この詩の美しさを側面から支えているのは、ライトモチー

フとしてある「月光」で、作者が感覚する長安を照らす月と、想像する鄜州の月は同じ月であり、又この同じ月を見ることが互いの心を結ぶ唯一の糸なのである。月を鏡として、互いの面影を映し、互いの心を映して伝えてくれるであろう。中国詩では月は空間と時間を超えて同じく人を照らすものとして、遠く離れた人や、遠い昔の人を偲ぶ道具に使われることが多い。しかし、この詩の結びのように離れている者が再会して見るであろう未来の月を想定したものが無い点でも、この詩の優れている所以である。中国の古典詩にあって、妻を臆面おくめんもなく詠ずる詩が少ない中でユニークな作品であろう。

〈杜甫の心境〉

杜甫の詩には「春望」にも表れるように、為政者たちが人民のことを考えず私利私欲の限りを尽くした結果の破壊と、道理に従って正確に運行を続ける自然とを比べながら、人間はなぜこうなんだろうと嘆き、世の中の平和を願う誠実な思いが感じられる。



杜甫像 (成都・杜甫草堂)

